

## 2011年 1月 活動

2011年 1月23日

●蓄電池のリサイクル現状と対応策について会員 鈴木一郎さんからの紹介がありましたので以下に示します。

蓄電池(特に産業用)は業界主導のシステムの下、「業界の業界による業界のための」リサイクルがされてきました。鉛の資源リサイクル率は100%に近く、それなりに成果を挙げてきたものと評価できます。しかし、産業の空洞化により、国内でリサイクル鉛を消費することは難しい状況にあります。

蓄電池は使用できる限界までモニタリングや測定をしながら使用する。さらに、限界を迎えて撤去された電池をただリサイクルするのではなく、再生技術を用いて復活させリユースする、これこそが「アクセスプラス」です。再生技術とは最適なインターバルを設けた特殊電解処理でサルフェーションを鉛イオンと硫酸イオンに分解し、劣化バッテリーを再生させ、使用可能な状態にする技術です。

エコエネルギー活用に際して、オンサイト電源に必要な蓄電デバイスが今後非常に重要な意味を持ってきます。残念ながら、蓄電池はとても高価であり、このコストのためエコエネルギーの活用が進まない恐れもあります。新技術バッテリーの実用安定化、低コスト化にはまだ10年以上の時間がかかるものと考えられます。このタイムラグを埋めるのがリユースバッテリーです。「エコエネルギー活用のための「アクセスプラス」の低コストリユースバッテリー」、これこそがブレイクスルーであると確信しています。

アクセスプラスの詳細は <http://www.replus-battery.jp/> をご参照ください。

2011年 1月15日

●新年会が開かれました！

REPA 新年会が2011年1月12日(水)18:30～ 東京・四谷 レストラン「ファミール」で開催されました。新たに会員になられた方も含めて13名で、情報交換、今年の活動抱負等いろいろ意見交換いたしました。当日のスナップを以下に掲載致します。今泉代表理事は仙台のバイオガスプラントの建設最盛期で、豪雪とも闘いながら、陣頭指揮を振っています。詳細は左の「今泉理事のTwit」を参照してください。現場が完成したらまた内容の御紹介をして戴きたいと思います。

先の話ですが**平成23年度の総会を6月4日**に計画しておりますので、ご予約ください。**REPAの懇親ゴルフ**

大会は5月28日です。



2011年 1月 8日

●新年会のご案内・・・再掲

REPA 新年会を2011年1月12日(水)18:30～ 東京・四谷 レストラン「ファミリー」で開催致します。情報交換、今年の活動等いろいろ意見交換致したいと存じますので奮ってご参加ください。会費は2000円です。参加希望者は事務局篠田までご連絡ください。

2011年 1月 1日

●新年のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。本年も当協会へのご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

昨年はCOP10、COP16が開催され、地球温暖化問題だけでなく生物多様性も視野に入れた複合的な活動が求められます。当協会もこの世界的な位置づけを踏まえ、一層充実した活動を展開して行きます。会員ならびに関係者のご協力をよろしくお願い致します。

年頭のごあいさつに代えて、当協会木村理事の宇宙から見た地球への思いを以下に示します。

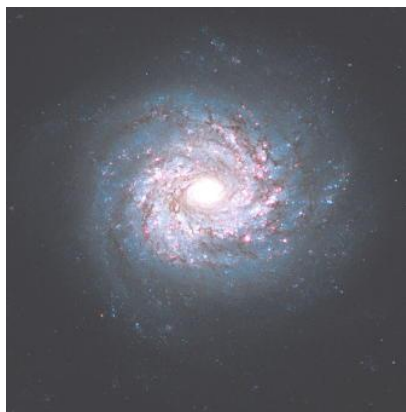
「かけがえない星、地球」・・・REPA 木村理事

小惑星探査機「はやぶさ」の活躍や日本人のノーベル賞受賞効果で、来年度の政府予算案のうち、文部科学省の研究開発費は大幅に増加した。研究費の増加は新たな宇宙の姿を次々と解明していくことだろう。最近の研究では、太陽系以外に地球と同じ惑星の存在が500例ほど発見されているが、どうやらわれらの地球は特別の星らしい。

「特別な星・地球」を一年の初めに時間と空間という夢のある話で考えてみたい。宇宙の中の地球はどんな存在なのか、宇宙はあまりにも広すぎて説明が難しいので、イメージしやすい単位で話をしよう。

太陽を直径10センチメートルの球(テニスボール)と仮定すると、地球は10メートル離れた直径1ミリの点に過

ぎない。金星は7メートル離れた位置にあり表面温度は470度、火星は15メートルの位置で赤道付近でもマイナス10度であり、共に生命の誕生には過酷な環境である。太陽(恒星)から程よい距離にあることが、生命誕生の条件なのだ。



この縮尺で計算すると、木星は52メートル、冥王星は400メートル(実際の距離は60億キロメートル)、太陽から一番近い恒星は2900キロメートル(なんと東京から香港の距離)の彼方にある直径10センチメートルの球なのである。この香港までの宇宙空間には何も存在しないのだ。実際には光のスピードをもってしても4.3年掛かる距離であり、これらの恒星が2000億個集まって銀河系を構成している。銀河系の直径は10万光年(光のスピードで10万年掛かる。)の広さがあり、銀河系から一番近い銀河が有名なアンドロメダ銀河で距離200万光年、それらの銀河が1000億個集まって宇宙を構成しており、一番遠い銀河は130億光年の彼方にあるらしい……(現在の科学では?)一方、人類が到達できた天体は月だけであり、それも光のスピードで1秒の距離に過ぎない。月まで1秒、宇宙の彼方は130億年、この広さ想像できますか。

そのかけがえのない地球で急速に環境破壊が行われ、それを食い止める有効な手立てもないまま、あらゆる分野で競争が行われている。

一方、地球誕生から46億年、この途方もない年月を分かりやすく1年に置き換えてみると、いかに人類が爆発的に環境を破壊しているかが良く分かる。

1月1日に地球が誕生したとすると、生命(バクテリア)の誕生が3月28日、三葉虫の出現は11月14日まで待たねばならない。恐竜の出現は12月11日、人類の誕生に至っては12月31日午前11時過ぎ、エジプト文明の誕生は午後11時59分31秒と除夜の鐘直前である。戦後復興から65年はなんと0.5秒!多くの生命の進化と時間を経て人類の繁栄に至っていることを思わずにはいられない。

この広い宇宙の中から人類の生存に適した星を見つけることは不可能に近い。これが環境問題を考える上で、「かけがえのない星・地球」の姿なのだ。